

慧苑音義音韻攷

——資料の分析——

水
谷
真
成

この拙き一文を

六十路の坂を越えられた

恩師 倉石武四郎博士に捧げる

先生のいよいよ御多幸ならんことを

もくろく

一 はじめに	(一四六)
一 慧苑の傳及び音義の成立	(一四六)
二 テキスト	(一四七)
三 本書の唐代音韻史上に於ける位置	(一四八)
四 作業の方法	(一五〇)
一 反切において	(一五〇)
二 音譯漢字において	(一五〇)
二 反切篇	(一五一)
一 聲韻表	(一五一)
二 聲母	(一五六)
一 唇音	(一五六)
二 舌音	(一五六)
三 齒音	(一五七)
四 牙音	(一五七)
五 喉音	(一五八)
三 韻母	(一五八)
一 通攝	(一五九)
二 梗攝	(一五九)

慧苑音義音韻攷

三 咸攝	(一九〇)
四 山攝	(一九一)
五 止攝	(一九三)
六 蟹攝	(一九三)
七 遇流攝	(一九三)
四 唇音の開合	(一九四)
五 聲調	(一九六)
六 むすび	(一九七)
三 音譯漢字篇	(一九七)
一 反切をもつ梵語音表記漢字	(一九七)
一 梵語字母	(一九七)
二 實叉難陀の音譯漢字に對する慧苑の音註	(一九八)
二 正梵音を表わす漢字	(一九八)
一 語彙	(一九八)
二 對音表	(一九九)
三 對應上の特徴	(二〇〇)
一 頭子音	(二〇六)
三 尾音	(二〇六)
二 主母音	(二〇九)
四 おわりに	(二一〇)

一 は じ め に

慧苑音義は、唐・實叉難陀譯「大方廣佛華嚴經八十卷」中に見える難字の音訓を注記した本來二卷の小冊子であるが、その引用書には佛典の他に儒書も多く見え、今日已に亡佚した書物、或は亡佚しないまでも傳來の書と比較するに異文も多く、諸面の研究に資料的價值を高く評價されているのであるが、今日まで、本書を調査した專論は見當らない。

この小論は、慧苑音義に見える反切及び梵語音表記漢字を資料として、この音義書の性格を音韻の面より見ようと試みたものである。

一・一 慧苑の傳および音義の成立^(一)

慧苑の傳の詳細は不明であつて、ただ、京兆の人であり、賢首大師法藏（唐居人、A.D. 七二二歿、壽七十）の高足であると傳つてゐるのみである。^(二)

慧苑音義の詳細は「新譯大方廣佛華嚴經音義二卷」という。その音義の對象八十卷新譯華嚴經の譯者于闐の人實叉難陀 *Sikṣānanda* は唐の高宗永徽三年（A.D. 六五二）——睿宗景雲元年（A.D. 七一〇）の人であり、新譯華嚴經は則天武后證聖元年（A.D. 六九五）——同聖歷二年（A.D. 六九九）の間に出來たといふことである。^(三)

また、音義序によれば、「小翫茲經、索隱從師、十有九載」とのことであるから、前後見合せてみると、慧苑は大略 A.D. 六七〇——七五〇 年、盛唐の人と見てよく、音義成立も A.D. 七二〇 年前後と推測しても大過なからう。

註

(一) 慧苑の傳および音義の成立、版本の種類等は陳垣、中國佛教史籍概論、一九五五、六四頁以下に詳述されている。いまはその記事に若干の知見を加えて年代の前後を考えてみたのみである。

(二) 開元錄卷九(大正五五、五七一上)

慧苑京兆人、華嚴藏法師上首門人。勤學無情、内外兼通、華嚴一宗、尤所精達。以新譯之經、未有音義、披讀之者、取決無從、遂博覽字書、撰成二卷、俾讀之者、不遠求師而決於字義也。

音義卷首に「京兆 靜法寺沙門 慧苑述」とある。

(三) 開元錄卷九(大正五五、五六六上)

一・二 テ キ ス ト

慧苑音義には藏經本と藏外本とがある。

藏經本に二系統あり、

一、二卷本 麗、宋、元、明南藏本。

二、四卷本 明北藏、嘉興藏本。

藏外本に五種あり、

一、拜經堂叢書所收二卷本 嘉慶四年藏庸刻、南藏系。

二、獨抱廬叢刻所收二卷本 道光間陳宗彝刻。

三、守山閣叢書所收四卷本

慧苑音義音韻攷

四、粵雅堂叢書所收四卷本

五、曹鑑校勘本 同治八年刻、玄應音義と合刻。

四卷本系統のものは二卷本に比べて異同出入多く、藏外本には音義中の梵語を全く除去したものもあり、何れもその原型より距離があるものの如く、依據するに躊躇を覚える。

今は主として「影印宋碛砂藏經第四六一冊辨帙」所收の二卷本により、縮冊藏經爲十所收の高麗藏經二卷本を参照して事を進める。

慧琳音義第二——二三巻にも華嚴經音義を收め「慧苑撰」と標しているが、實は慧琳の訂正した箇所が間々あるのみならず、標出文字までも増加している。これは慧琳音義所收の玄應音義についても同様である。一般に善本と言われる麗藏も、慧苑音義の反切については慧琳音義（麗藏にのみ傳わる）と甚だ近く、宋元明藏系統とは別系列をなす観がある。この事實は麗藏成立を考える際の一つの鍵ともなるものであろうが、今は事實を指摘するのみにとどめ立入らない。

一・三 本書の唐代音韻史上に於ける位置

慧苑音義の前後にある音韻資料を年代順に並べてみると、

A.D. 六〇一 「切韻」撰

六一八 唐朝開創

六六一 「玄應音義」撰

七二二 「古事記」撰

七二〇 「日本書紀」撰、「慧苑音義」この頃に成る。

七八四 「慧琳音義」作製開始

ca. 八四〇 慈覺大師圓仁「在唐記」(A.D. 八三八—八四七入唐) 安然「悉曇藏」(圓仁の弟子八八九—八九八歿)

九〇七 唐亡

九四〇 可洪「新集藏經音義隨函錄」撰

ca. 九八七 「希麟續音義」撰

一〇〇八 「大宋重修廣韻」撰

一〇三九 「集韻」撰

唐代佛教盛行に依るものであろうが、また一面、當時の語學興隆の状をも覗い得べく、從來の切韻——廣韻間に於ける音韻史研究の空白期間をうづめるに充分であらうし、このような音義書頻出は當時の音韻變化の著しきことを暗示するものであるとも見れよう。

慧苑音義成立の年代が、日本に於て從來の所謂吳音表記に代つて新らしい漢音表記を採つた最初の書である「日本書紀」撰述とはほぼ同じ頃であることから、本書は日本漢字音研究にとつても充分注目しなければならないものであることも知れよう。^(二)

註

(一) この間の關係の一端は拙稿・「唐代における中國語頭鼻音の Denasalization 進行過程」、東洋學報第三九卷第四號(以下「非慧苑音義音韻攷」

鼻音化」と略稱する）及び「曉・匣・兩聲母の對音」、東洋學報第四〇卷第四號にも觸れた。

一五〇

一・四 作業の方法

一・四・一 反切において

本書に見える反切を系聯法により集收分類し、廣韻（切韻）に對する聲韻の離合狀況を見るのであるが、慧苑音義に於る反切の總數七八七例のうち、梵語音を表記する漢字に對する反切四五例を除けば僅かに七四二例の小數であるため、系聯法の効果は充分に達し得ない。また、難字に對する音訓注釋書という音義書の性格から當然のことであるが、分布が頗る偏より、聲韻全般の様子を知るためには不充分であることもやむを得ない。

一・四・二 音譯漢字において

梵語音を表わす漢字に對する反切は、正梵音を表記する漢字と相俟つて、梵漢兩面を對照させることにより、音價考定の手がかりとする。但し、慧苑音義に於る梵漢對音には注意を要する。すなわち、音義の對象八十卷華嚴の譯者實叉陀は于闐（Khotan）の人であり、慧苑の師の法藏も康居（Soghdiana）の人と見えていて、共にその梵語音は印度西北方音（North-Western Prakrit）の音系に所屬する人々と考えられ、玄奘の大唐西域記・玄應音義の梵語表記漢字を考える場合とは別箇の方法を採らねばなるまい。従つて、ここでは、問題の複雑化を避ける爲に、正梵音を表記する漢字と、その他の場合とを分けて取扱うこととする。^(一)

以上、反切面よりと、音譯漢字面よりとの二面から當面の問題を考察してみよう。

(一) 對應音系の問題については前記拙稿「非鼻音化」参照。

二 反 切 篇

ここに於る作業の對象は、梵語音を表わす漢字に對する反切を除くその他の七四二例である。

二・一 聲 韻 表

次の標準に従つて分類表示する。

- 1 等韻に於る韻攝に従い、先ず十六分する。
- 2 各攝内に於て廣韻（切韻）の韻部に分類する。
- 3 各韻部内に於て聲類に分類する。この際の聲類の名稱は通例に従う。
- 4 「別音」は混雜を避けるため採らない。
- 5 「二反」は上の反切により一括分類し、分離配屬しない。
- 6 反切の下の數字は、その反切が慧苑音義に於て出現する回數を示す。三十六字母と廣韻の韻目に従い分類をしたものであり、この分類そのものが慧苑の聲韻のシステムを示すものでないことは言うまでもない。

一 通 攝 (計五〇例)

滂	聲 韻	
	東	董
		送
		屋

慧苑音義音韻攷

非 敷 奉	明 端 定 來 知 娘 精 見 匣 影 喻 四
焄〔徒東1〕	
湏〔胡動1〕 蓐〔烏孔1〕	
譟〔方風1〕	棟〔都弄2〕 洞〔徒弄3〕
中〔陟仲3・張仲2〕	綜〔子貢1〕(二)
覆〔孚伏1・撫目1・芳福1〕 復〔符福2・扶福1・孚祿1〕 渡〔符福1・浮福1・音服1〕 馥〔符福1・扶福1〕 牧〔亡福莫六1〕	戮〔隆育1〕
𪔐〔女育1・女六女育1〕	覺〔子六1〕
鷗〔與六1〕	鞠〔居六1〕

註

- (一) 復 宋本作「孚祿反」、慧琳及元明藏本作「孚福反」、麗本作「房福反」
 (二) 綜 廣韻作「子宋切」、精宋開一

慧苑音義音韻攷

一五三

徹	澄	精	心	照三	穿三	日	喻四
傭〔丑恭1〕	縱〔紫容1〕			衝〔昌容1〕	傭〔與恭1〕		
重〔直勇1・直隴1〕	聳〔息勇2〕						
重〔直用1・除用1〕							
				曷〔之欲1〕	萼〔如欲2〕		

透	影
冬	
宋	統〔他宋1〕
沃	沃〔烏鵲1〕

二江攝 (計一〇例)

一五四

聲韻	並	澄	見	溪	影
江	扛〔音江1〕				
講	蟀〔蒲項1〕				
絳	虹〔古巷胡公1〕 降〔古巷1〕				
覺	擢〔直角1・除覺1〕 殼〔苦角3〕 坼〔於角1〕				

三宕攝 (五三例)

開	合聲韻	
	陽	養
非	坊〔甫良1〕	漾
敷	防〔浮亡1〕	
來	梁〔呂羊1〕	
澄	長〔直良1〕	
精	槍〔七羊1〕	藥
清		
	</	

慧苑音義音韻攷

開						開 聲 韻
來	泥	定	端	明	並	
			璫〔得郎2〕		傍〔薄郎1〕	唐
			蕩〔唐朗1〕 曩〔那朗2〕			蕩
						宕
			摸〔謀各1〕漢〔謀各1〕 度〔唐各1・唐洛1〕 樂〔郎各2〕			鐸

合			口			
喻 三	曉	見	喻 四	影	曉	羣 日 照 三
				央〔於良2〕		悼〔諸羊1〕 攘〔如羊1〕
				鞅〔於仰1・於兩1〕	强〔其兩1〕 聶〔虛鞅1〕享〔虛兩1〕	
况〔許誑1〕 王〔于誑1〕			養〔余亮1〕			
	攬〔拘縛1〕		闔〔餘灼1〕			

四 梗 攝 (五七例)

開		開
口	聲	韻
匣 曉 疑 見 照 並 滂 幫		庚
行(遐庚1)	榜(蒲庚1)	
	梗(加杏1)	梗
炳(彼永2)		
行(遐孟2)	硬(顏孟1)	映
赫(許格2·亨格1)	窄(側格1)	陌
戟(居逆1)	怕(普白1)	

口 合	口
匣 溪	匣 曉 疑 溪 精
	航(何剛1)
晃(胡廣1)	
曠(苦謗2)續(苦謗1)	
廓(苦郭1)	作(則各3)
	恪(康鶴1)
	罈(俄各1)
	壑(呵各1)
	涸(何各1)

慧苑音義音韻攷

口 開							口 開	口 開	口 合
影 見 牀 穿 照 從 知 來							影 匣 穿 明	影 耕	見
嬰〔於盈1・於征1〕							禎〔陟盈1〕	萌〔莫耕1〕	
拯〔之領1〕							靜	耿	獷〔古猛2〕
勁〔甄盛1〕							勁	靜	
射〔神亦1〕 適〔尺亦1〕							昔	麥	

開										合	聲	韻
口												
影	曉	溪	見	心	清	來	泥	定	透	端		
										青		
										迴		
										徑		
										錫		
寧〔顯形 1〕										聽〔他等 1〕		
醒〔桑形桑逕 1〕										適〔丁歷 1〕		
齡〔歷丁 1〕圉〔歷丁 1〕										滌〔田歷 1〕		
寧〔年形 1〕										礫〔零激 1〕		
淳〔笛零 1〕										碩〔選歷 1〕戚〔千曆 1〕		
										析〔蘇歷 1〕		
										激〔經歷 2・古歷 1〕		
瑩〔烏定 1〕												
聲〔牽定 1〕												

口	合		
影	羣	喻	四
莞〔渠營 1〕 縈〔於營 1〕			
		弈〔移益 2〕瘍〔移益 1〕	

口合	匣
迺(胡頂2・胡炯1)	

註

(一) 硬 廣韻、五爭切、疑靜開二

(二) 拯 廣韻、章虔切、照拯開三

五 曾 攝 (二三例)

開 口	開 聲	韻
溪 從 定 端 明	登	層(但登1) 層(賊楞1)
	等	
	磴	墮(多鄧1)
	德	縵(莫北1) 克(肯勒1)

開 合	開 聲	韻
審 從 娘	蒸	縵(疾陵2・疾綾1)
	拯	
	證	
	職	匿(尼力1) 穡(善色1)

悲苑音義音韻攷

聲韻						
幫	知	徹	精	審 _三	日	溪
侵						
砧〔陟林1〕 蹊〔勑林1〕						
欽〔去今1〕						
寢						
稟〔彼錦2〕						
沁						
滲〔所禁1〕 任〔如禁1〕						
緝						
轍〔資入資藥1〕 漚〔失入1〕						

六 深 攝 (一二例)

7

口合		口				
曉	喻四	疑	禪	牀三	穿三	
					稱〔昌陵1〕	
					稱〔昌孕3〕 乘〔食證3〕	
洫〔許域1〕		翊〔以力1〕弋〔餘力1〕	巖〔魚力1〕	植〔承力2〕		

娘 定		聲／韻	匣 見		聲／韻	匣 見 定 透 端					聲／韻	影
恬〔田鹽1〕		鹽			咸	耽〔都含1〕					覃	七 咸 攝 (四七例)
		琰	減〔間斬1〕		嫌	菑〔徒感1〕 齒〔胡感1〕					感	
		豔			陷	紺〔古暗1〕					勘	
躡〔尼獵1〕鐸〔尼軌1〕		藥	洽〔侯夾4〕		洽	濕〔他合1〕					合	
												飲〔於禁1〕蔭〔於禁1〕
												挹〔因入1〕

匣 溪 見 定 端	聲 韻
恬〔徒嫌1〕	添
	忝
玷〔丁念2〕	栳
揅〔徒協1〕堦〔徒頰1〕牒〔徒頰1〕 頰〔兼協1〕 篋〔牽協2〕慳〔牽協1〕 挾〔弦頰1〕	帖

影 疑 禪 照 心 從 清 精 來	三
獸〔於鹽1〕	鹽〔力鹽1〕 僉〔七鹽1・七廉1〕 織〔相鹽1〕鈺〔斯鹽1〕
儼〔魚檢1〕	
獸〔於燄1〕	贍〔時燄1・市焰2〕 塹〔七燄1〕
憚〔之葉1〕	捷〔錢葉1〕 隄〔煎葉1〕

註

(一) 恬 廣韻、徒兼切、定添開四
 (四) 儼 廣韻、龜掩切、疑儼開三
 (六) 玷 廣韻、多忝切、端忝開四
 (八) 炎 廣韻、于廉切、于鹽開三

(二) 後文
 (五) 後文
 (七) 坎 廣韻、苦感切、溪感開一
 (三) 後文

懸苑音義音韻攷

一六三

喻三	聲韻
炎〔于嚴1〕	嚴
	儼
	儼
	業

匣 見	聲韻
	衙
檻〔胡隲2〕	檻
鑿〔古懺1〕	鑑
	狎

疑 溪 定 透	聲韻
	談
檐〔徒敢徒檻1〕 坎〔口攪1〕	敢
	闕
瘡〔五盞1〕	盞
搗〔他盞1〕	

八 臻 攝 (七三例)

一六四

開					合聲韻	眞	軫	震	質
疑羣日照三並滂									
𩺰〔魚巾1〕						𩺰〔疋仁1〕 𩺰〔婢人1〕𩺰〔脾仁2〕		𩺰〔蒲忍扶忍1〕	
𩺰〔渠恹1〕 𩺰〔渠恹1〕									

聲韻					
匣	溪	從	清	精	定
渾〔戸昆1〕					
蹲〔徂崙1〕					
臂〔徒論1〕豚〔徒魂1〕					
混					
忖〔忿本1〕					
閻〔苦本1〕					
混〔胡本1〕					
恩					
沒					
卒〔作沒1・則沒1〕					

口 合				口		
喻三	影	見	審二	喻四	影	曉
				茵〔於眞1〕		
殞〔爲愍1〕 蘊〔於殞1〕 摺〔居殞居遲1〕						
				疊〔許覲1〕 印〔於胤1〕		
帥〔所律1〕				佚〔夷日1〕溢〔夷日1〕汨〔榮筆1〕		

影 疑 羣 見				聲 韻
筋〔居欣1〕				欣
穩				隱
穩〔於靳2〕 涇〔魚靳1〕 近〔渠靳1〕				焮
				迄

見	審 三	牀 三	邪	心	清	精	來	聲 韻
均〔居春1〕			循〔祥倫2〕		𪔐〔七倫1〕		綸〔力唇1〕	諄
楯〔述尹1・食尹1〕								準
瞬〔舒閏1〕				駿〔將閏1〕				稕
				卒〔將聿1〕 邨〔須聿1〕				術

聲韻					文	吻	問	物
喻 _三	影	微	奉	敷	芬〔孚云1・𩇛雲1〕紛〔撫云1〕 分〔方云1〕氛〔符云1〕	吻〔無粉2〕	分〔符問2・浮問1〕憤〔夫問1〕 聞〔無運3〕 慍〔於運1〕	
𩇛〔于君2〕	𩇛〔於云1〕							

註
(一) 捫 廣韻、莫奔切、明魂合一
(二) 憤 廣韻、房吻切、奉吻合三

九山 攝 (一〇六例)

聲韻					寒	旱	翰	曷
心	來	泥	定	透	並			
		難〔那乾1〕 欄〔勒丹1〕			癢〔清寒1〕	坦〔他顛1〕 誕〔唐亶1〕袒〔唐亶1〕	憚〔唐翰1〕 難〔那翰1・那幹1〕	闕〔他達1〕撻〔他刺1〕
						傘〔桑亶1〕		

慧苑音義音韻攷

開合		曉 疑 見 心 清 精 來 定 透 端										聲韻	匣 見	
見	山	湍〔吐官2・他官1〕 搏〔徒憊1〕 鑽〔則官2〕 酸〔蘇官1〕 冠〔古丸1・古端1〕貫〔古丸1〕										桓		
簡〔皆限1〕	產	斷〔都管1〕 卵〔魯管1〕 鹽〔古滿1〕										緩		
閒〔皆寬1〕	稠	斷〔都亂3〕 段〔徒玩1〕 竄〔龜亂1〕 冠〔古亂3〕 玩〔五段1・五換1〕 煥〔呼換1〕										換	幹〔哥旦1〕 扞〔何旦1〕	
	鎔	撮〔龜括1〕										末		

慧苑音義音韻攷

一六九

口 合	口 開	口 開 聲 韻
喻 奉 三	影 曉 疑	元
垣(于元 1)	焉(於言 1) 軒(許言 1)	阮
飯(扶腕 1)	厭(魚偃 1)	願
粵(于月 1) 筏(房越 1)	謁(於歇 2)	月

口 合	口 開	合 開 聲 韻
匣 見	影 見	刪
環(戶關 1)		潛
慣(古患 2) 環(古串 1)	潤(古鴈 1) 晏(於諫 1)	諫
		黠

口 合	疑
頑(五鯨 1)	

A 口 合					B 口 開					A 口 開					開 合 聲 韻
喻 四	見	邪	穿 三	牀 二	明	幫	禪	心	清	澄	來	明	幫		
捐〔與專 1〕		旋〔徐戀 1〕					鋌〔市連 1〕	鮮〔相延 1・斯延 1・新然 1〕	遷〔七延 2〕痊〔七綠 1〕	傳〔除綠 1〕塵〔除連 1〕					仙
			舛〔昌輦 1〕			免〔亡辯 1〕	埠〔常演 1〕	鮮〔斯演 1〕		緬〔彌演 1〕	編〔方緬 1〕				獮
			釧〔昌戀 1〕	饌〔仕眷 1〕			繕〔視戰 1〕								線
缺〔傾雪 1〕						別〔彼列 1〕荊〔彼列 1〕			撤〔除列楮列 1〕	裂〔力哲 1〕					薛

幫	開合聲韻	
	支	紙
俾〔卑爾2〕		寘

一〇止 攝 (九六例)

註
 (一) 廢 廣韻、薄官切、並桓合一
 (三) 編 廣韻、補典切、幫銑開四
 (五) 絢 廣韻、許縣切、曉霰合四

(二) 頑 廣韻、五還切、疑刪合二
 (四) 璜 廣韻、他旬切、透霰開四

口合			口開			開合聲韻
影	匣	見	影	曉	定明並	先
淵〔烏玄4〕		錫〔古玄1〕			填〔唐賢2〕錫〔唐賢1〕	
		腎〔古法2〕			殄〔唐顯1〕 編〔蒲典1〕 <small>(三)</small>	銑
絃〔古練1〕					璜〔唐見陟憐1〕 絢〔呼遍1〕 <small>(五)</small> 宴〔於見3〕咽〔於見1〕	霰
		訣〔古穴1〕映〔古穴1〕			蔑〔莫結1〕 苾〔蒲結1〕	屑

A 口 合					B 口 開					A 口 開							
日	穿三	照三	穿二	來	影	羣	見	明	並	幫	喻四	審三	心	從	精	澄	徹
					猗〔於宜1〕	歧〔矩羈1〕	羈〔居宜1・寄宜1〕			陂〔彼爲1〕			徙〔仙紫1〕	疵〔疾移1〕		馳〔直知1〕	螭〔勅支1〕
藥〔如捶1〕		捶〔之藥1〕	揣〔初委1〕			妓〔奇綺1・渠倚1〕		靡〔母彼2〕			弛〔式爾1〕	璽〔斯爾1〕		咎〔資爾1〕		雉〔直爾1〕	
吹〔昌僞1〕			累〔臚僞1〕						被〔皮義5〕	陂〔彼義1〕	易〔羊豉2、以豉1〕			積〔卽賜1〕			

慧苑音義音韻攷

從	B 口 開	A 口 開	開 合 聲 韻
	羣 明 幫	喻 心 精 澄 知 來 明 幫	脂
		喻四 怡〔與脂 ^(二) 〕夷〔以脂 ^(二) 〕 咨〔將伊 1・音諮 1〕 堤〔直尼 1〕	
	鄺〔悲几 1〕 蹏〔其几 1〕	稚〔直履 ^(二) 〕	旨
	轡〔鄺媚 1〕 彪〔眉祕 1〕 豎〔渠器 1・渠囊 1・渠祕 1〕	酒〔先利 1・音四 1〕 緻〔陟利 1〕 絳〔直利 1〕	至
	萃〔疾醉 1〕悴〔疾醉 1〕	庇〔必至 1・卑至 1〕 寐〔彌利 1・蜜二 1〕 莅〔力至 1〕 致〔陟利 1〕 緻〔直利 1〕	

B 口 合	
喻三	溪
爲〔于危 1〕	窺〔遣規 1〕
爲〔于僞 1〕	

聲韻										B口合		A口合	
喻四	影	曉	見	禪	審三	照三	審二	心	徹	羣見		喻邪心	
之													
管〔勅之1〕													
譏〔居熙1〕 熙〔許基1〕嬉〔許其2〕													
止										晷〔音軌1〕		唯〔營癸1〕	
峙〔持止1〕													
趾〔之市1〕 矢〔式耳2〕 恃〔時止1〕 己〔居里2・基理1〕紀〔居理1〕 已〔余里1〕													
志										匪〔其位1・渠位1〕		晬〔宣醉1〕遽〔辛醉1〕 燧〔徐醉1〕	
思〔先吏1〕伺〔相吏1〕 駛〔所吏1〕使〔所吏1〕 衣〔於記2〕 衣〔於記2〕 _(五)													

懸苑音義音韻攷

定 滂	聲 韻
坏〔普該1〕	哈
	海
逮〔唐愛2・唐藥1〕	代

一 蟹 攝 (五〇例)

- 註
- (一) 雅 廣韻、直利切、澄至開三
 - (二) 怡 廣韻、與之切、喻之開四
 - (三) 夷 廣韻、與之切、喻之開四
 - (四) 矢 廣韻、式視切、審旨開三
 - (五) 衣 廣韻、於既切、影未開三

口 合	口開	開 合
喻 影 曉 非	影	聲 韻
闌〔子歸1〕	微〔許章1〕	微
偉〔子鬼1〕	匪〔方尾1〕	尾
慰〔於謂1〕		未

開	合 開	口 開	合 開	匣 見 泥 端	聲 韻	溪 見 從
明 並	聲 韻	滂 幫	聲 韻	涸 (音回 1) 回 (音廻 1)	灰	纔 (昨來 1)
排 (蒲諧 1)	皆			墮 (都廻 1)		
	駭			餒 (奴罪 1)	賄	
邁 (莫界 1)	怪	霈 (普蓋 1)	泰	憤 (公對 1) 績 (胡對 1)	隊	漑 (古代 1) 鎧 (肯代 1) 款 (冤代 1)

A 口 開	禪 來 明 並	<div>開 合</div> <div>聲</div> <div>韻</div>
曄(毗例 1) 袂(彌勵 1) 勵(力制 1) 噎(常制 2)		祭

口 合	口 開	口 開 聲 韻
匣 見	影 並	佳
	罷〔蒲解1〕	蟹
挂〔古賣1〕 罍〔胡卦1〕	隘〔於懈3〕	卦

口合	口
疑	匣見
	駭〔閑楷 1〕
聒〔五怪 1〕	轄〔加邁 1〕 械〔候界 1〕

註

- (一) 環 廣韻、偏杯切、滂灰合一、集韻、鋪來切、滂哈開一
- (二) 邁 廣韻、莫話切、明夬開二

開口								合聲韻	A口合		B口開	
影 匣 疑 從 清 來 透 端 滂									審 日		溪	
低〔丁奚1〕								齊				
齊〔藏奚1〕 蜺〔研奚1〕												
涕〔他禮1・音體1〕								齊				
塊〔研禮1〕												
候〔零計1〕 砌〔千計1〕								霽	蝕〔如銳1〕 說〔書審1・書銳1〕		蝕〔去例1〕	
繫〔胡計1〕 翳〔於計1〕 翳〔於計1〕 翳〔於計1〕												

慧苑音義音韻攷

開	開	
	合	聲韻
見 牀三 邪	麻	
	馬	
樹〔徐夜1〕 射〔食夜1〕 稼〔加暇1・音嫁1〕	禡	

一三 假 攝 (一〇例)

註
(一) 頗 廣韻、(1)滂禾切、滂戈合一、(2)普火切、滂果合一、(3)普過切、滂過合一
(二) 匣 廣韻、普火切、滂果合一

見	聲韻
戈〔古禾1〕	戈
	果
	過

溪 精 滂	聲韻
珂〔可何1・恪何1〕	歌
頗〔普歌1〕 頗〔普我普俄1〕匣〔普我1〕	哿
佐〔臧箇1〕	箇

一二 果 攝 (七例)

一四遇 攝 (六九例)

口	
匣 知	喻 影 匣
曉〔陟苾 1〕	瑕〔行加 1〕 椰〔余遮 1〕
俾〔胡寡力果 1・胡瓦盧果 1〕	鹽〔於雅 1〕

一八〇

聲 韻		
滂 端 定 來 清 從 見 疑 匣	模	姥
弧〔戸吾 1・戸孤 1〕		溥〔潘補 1〕剖〔潘補 1〕 堵〔當古 1〕 櫓〔郎古 1〕
估〔胡古 2〕祐〔胡古 1〕		估〔公戸 1〕蠱〔公戸 1〕鼓〔公戸 2〕 瞽〔公五 1〕
寤〔吾故 1〕 漢〔普護 1〕		度〔徒故 1〕 措〔倉固 1〕 祚〔字故 1〕

非	聲韻	喻四	曉	疑	羣	見	審三	穿三	照三	照二	心	從	澄	知	來	聲韻
	虞	滑(相余1)										漁(御居疑據1・語居語據1)				魚
	慶	與(與居1) 噓(許於1) 禦(魚舉1)罔(魚舉1) 矩(渠與1)拒(渠呂1) 杵(昌與2) 渚(支與1) 沮(才與2)咀(才與1)										旅(力與1) 貯(張呂1・陟呂1) 佇(除呂1)				語
	遇	豫(余據1・餘茹1)譽(余茹1) 馭(魚據2)御(魚據1) 遽(渠預2・渠慮1) 倨(居御1)踞(居御1) 恕(傷預1) 詛(側預1)														御

傳(府遇1)

見	溝〔古侯1〕
疑	偶〔吾苟1〕藕〔五苟1〕
曉	吼〔呼口2〕

聲韻		尤	有	宥
敷	熬〔音牟1〕 (三)	皐〔扶九2〕 (二)	覆〔芳富1〕	
奉	稠〔直由1〕儻〔直由1〕			
明	修〔相由1〕			
澄	游〔似由以周1〕			
心				秀〔私又1〕
邪				漱〔史救1〕
審二	舟〔章由1〕			
照三	仇〔渠尤1〕	咎〔渠久1・其柳1〕		
羣	休〔許鄰1〕			驥〔許救1〕
曉	疣〔有鳩1〕			祐〔尤救2〕有〔爰救1〕
喻三				

註

(一) 矛 廣韻、莫浮切、明尤開三、慧琳改作「莫胡反」明模合一

(二) 皐 廣韻、房久切、奉有開三、韻英作「扶武反」虞韻(周法高「玄應反切考」三六八頁參照)

(三) 熬 廣韻、莫浮切、明尤開三、集韻、迷浮切、改入侯部一等

慧苑音義音韻攷

一六效

攝 (四八例)

一八四

娘	聲韻	曉 疑 溪 心 清 精 來 泥 定 透 端 並	聲韻
肴		<p>曉〔呼高2〕</p> <p>變〔奴刀1〕</p> <p>濤〔唐勞1〕</p> <p>叨〔他勞1〕</p>	豪
巧		<p>島〔當老1〕</p> <p>蹈〔徒到2〕</p> <p>潦〔郎擣1〕</p> <p>澡〔子老1〕</p> <p>燥〔蘇草1〕</p> <p>稿〔苦老1〕</p>	皓
效		<p>暴〔蒲報2〕 瀑〔蒲報1〕</p> <p>躁〔則到2〕</p> <p>操〔倉到1〕</p> <p>傲〔五告2〕</p> <p>好〔呼到1·呼告1〕 耗〔呼告1〕</p>	號

橈〔女教如紹1〕

見 來 泥 透	聲韻	影 見 日 禪 審 照 心 從 明	聲韻	曉 疑 見
挑〔天彫2〕	蕭	樵〔疾遙1〕 霄〔相遙1〕	宵	
曉〔乃鳥1・乃了1〕 繚〔零鳥1・令鳥1〕 嗽〔經了1〕	篠	召〔之繞1〕 紹〔市沼1〕 擾〔如沼1〕 矯〔居天1〕 夭〔於矯2〕	小	
	嘯	詔〔章曜章遙1〕 燒〔書耀1〕	笑	敦〔古孝古包1〕覺〔古貌1〕 樂〔五敦2・牙敦1〕 哮〔呼敦1〕

二・二一 聲 母

一八六

反切の用字に於て見られる聲母の特徴のうち、目立つたもののみを挙げるに止める。

二・二一・一 唇 音

反切上字に於て唇音の輕重は分離して混じない。後に見る(三・二)梵語音表記法と考え合わせると、慧苑に於ては既に輕唇音が獨立したものと解してよからう。

約六十年前の玄應に於ては輕重混淆して輕唇音の獨立は認め難い(周法高「玄應反切考」、集刊第二十本上)。慧苑後約六十年程の慧琳に於ては判然と分離している(黃淬伯「慧琳一切經音義反切攷」、史語研究所專刊之六)。

また、清音の敷母と濁音の奉母との混淆が見られる。

〈敷〉 撫〔孚〕武1・芳武1・𪛗禹1〕

覆〔孚〕伏1・撫目1・芳福1〕

芬〔孚〕云1・𪛗雲1〕

〈奉〉 復〔孚〕祿1・扶福1・符福2〕

孚祿反は麗藏の房祿反(奉母)と比較して直ちに誤寫であると速断するには躊躇を覚える。慧苑より後に顯著になる濁音無聲化の一路録と見れないであろうか？

二・二一・二 舌 音

舌頭音(一四等)と舌上音(二三等)の反切上字は分離して混じない。梵語音表記法と特徴を一にしている。

切韻・玄應に於ても分離する傾向が強いが、尙、混淆しているものがある。慧琳及びそれ以後に於ては判然と分離する。また、慧苑に於る舌上音の二等と三等の間の反切上字には差別は見られず、ただ一類である。

二・二・三 齒 音

齒頭音の一等と四等の反切上字は、それぞれ獨立して混じない大勢にある。

切韻に於る反切上字は一四等共に區別なく一類となす傾向にあり、玄應に於ても同様であるが、慧琳となるとはつきりと分れ二類としている。

正齒音の二等（用例は少い）と三等とは、切字が區別されていると見て差支えなからう。

切韻・玄應及び慧琳を通じて、この傾向に變りはない。

〈牀_三母と禪_三母は分離していると見よう。

〈牀_三射〔食夜1・神亦1〕楯〔食尹1・述尹1〕乘〔食證3〕

〈禪〉鋌〔市連1〕紹〔市沼1〕瞻〔市箴2・時箴1〕恃〔時止1〕

啞〔常制2〕墀〔常演1〕

植〔承力2〕

繕〔視戰1〕

切韻・玄應に於ても混淆を見せないが、顏氏家訓によると江東方言では隋代に既に混じていた如く、又、玉篇・經典釋文の書とか、慧琳及びそれ以後は秦音系でも次第に混淆する傾向をとる。（羅常培、唐五代西北方言、二十二頁）

二・二・四 牙 音

慧苑音義音韻攷

四等字の反切上字は獨立する傾向が顯著に見える。

〔見〕に於ては尙不明瞭であるが、〔溪〕母と〔疑〕母に於てはこの傾向が特に強く見れる。

切韻及び玄應に於ては一二四等一類、三等一類と二類になつてゐるが、慧琳に於ては一二等、三等、四等の三類に反切上字を分つてゐる。

二・二・五 喉 音

〔喻〕_三母と〔匣〕母の反切上字の分離は明瞭である。

〔喻〕_三 關〔于歸1〕偉〔于鬼1〕爲〔于危1・于僞1〕殞〔爲愍1〕雨〔于句1〕垣〔于元1〕粵〔于月1〕耘

〔于君2〕炎〔于嚴1〕王〔于誑1〕

宥〔爰救1〕

疣〔有鳩1〕

〔匣〕₁ 晃〔胡廣1〕鴻〔胡動1〕菡〔胡感1〕混〔胡本1〕怙〔胡古2〕祐〔胡古1〕績〔胡對1〕倮〔胡瓦盧果

1・胡寡力果1〕罌〔胡卦1〕摠〔胡串1〕檻〔胡黠2〕環〔胡關1〕迥〔胡頂2・胡炯1〕絃〔胡練1〕

繫〔胡計1〕

2 很〔何壘2〕航〔何剛1〕涸〔何各1〕扞〔何且1〕幸〔何耿1〕

3 弧〔戸孤2〕痕〔戸恩1〕渾〔戸昆1〕

4 械〔侯界1〕洽〔侯夾4〕

5 行〔遐孟2・遐庚1〕瑕〔行加1〕

6 回〔音廻1〕 洄〔音回1〕

7 駮〔閑楷1〕

8 翮〔莖隔1〕

9 挾〔弦頰1〕

10 濩〔音護1〕

經典釋文、切韻及び玄應では噓三母と匣母とは、なお混淆している。慧琳及びそれ以後は判然と分離している。

二・三 韻 母

韻母に於ても反切の用字上目立つた特徴のみを擧げるに止める。

二・三・一 通 攝

(東・冬) 兩韻通用の傾向が見える。

綜 (廣韻…子宋切・精宋開一) (子貢反 (精東開一))

隋代の顏氏家訓音辭篇によるに河北にこの傾向が見えるのとことであり、玄應に於てもこの傾向がある。慧苑を越えて慧琳となると愈々この潮が甚だしい。

二・三・二 梗 攝

硬 (廣韻…五爭切・疑諄開二) (顔孟反 (疑映開二))

廣韻校勘記 (周祖謨撰、語研究所專刊) 卷四に

慧苑音義音韻攷

案爭字在耕韻、此字音五爭切、誤。棟亭本作五諍切、是也。故宮本敦煌本王韻唐韻此字入敬韻、音五孟反。と見え、唐韻の誤を指摘しているが、慧苑の音註はまさに切韻の線に沿うものである。

拯〔之領反1〕は靜・拯二韻通用の例の如くであるが、孤立した例で詳細不明である。

二・三・三 咸 攝

(覃・談) 兩韻通用の傾向がある。

坎 (廣韻…苦感切・溪感開一)〔口攬反 (溪敢開一)〕

(鹽)・添 (嚴) 三韻通用の傾向も見える。

恬 (廣韻…徒兼切・定添開四)〔田鹽反 (定鹽開四)〕

儼 (廣韻…魚掩切・疑儼開三)〔魚檢反 (疑琰開三)〕

炎 (廣韻…于廉切・于鹽開三)〔于嚴反 (喻嚴開三)〕

これを慧苑前後の書と並べ表示する。

韻目		書名
談	覃	廣韻
通用		應音
(獨用)	(獨用)	韻詮
談	覃	苑音
(通用)		琳音
(通用)		集韻
通用		

衙	咸	凡	嚴	添	鹽
通用		通用		通用	
(通用)		(通用)		(獨用)	(獨用)
咸		嚴		添	鹽
(明 不)			(通用)		
(通用)			(通用)		
通用			通用		

廣韻に於ける通用は唐初の許敬宗が認めたというそれを示した。また、唐人武玄之の韻詮は佚書であり、今は安然の悉曇藏卷二に韻目の引用が見えるのみで、その時代を明かにしないが、韻部の併合状況を見るに玄應に近いたため、いま假に玄應の次に入れた。(嚴・凡・咸・衙)四韻に於て韻詮には(嚴・咸)二韻より見えず、(凡・衙)の併合箇所については明示していないが、その性格より圖の如きものと判断した。次項止攝に於ても同様である。韻詮に就いては大矢透(韻鏡考第_{十一}章)、王國維(觀堂集_{林卷八})兩氏の説があるが、年代にはふれていない。

二・三・四 山 攝

いわゆる二等重韻の(刪・山)二韻通用の例がある。

頑(廣韻…五還切・疑刪合二)〔五鯨反(疑山合二)〕

玄應音義・慧琳音義共にこの通用が見えるし、武玄之の韻詮も(山)一韻のみ見え(刪)韻は擧げられていないが、恐らく前者に併合されたものと思われる。秦音系に於る最も古い特徴の一つであろう。

二・三・五 止 攝

(脂)・(之)・(微)三韻通用の傾向がある。

怡 (廣韻…與之切・喻之開四)〔與脂反(喻脂開四)〕

夷 (廣韻…以脂切・喻脂開四)〔以脂反(破・魔)以之反(宋元明)〕

矢 (廣韻…式視切・審旨開三)〔式耳反(審止開三)〕

この三例は(脂)・(之)兩韻混淆を示すものである。

衣 (廣韻…於既切・影未開三)〔於記反(影志開三、琳一作「於紀反」、影止開三)〕

この一例は(之)・(微)兩韻の混淆を示すものである。但し、(支)韻と通用する例は見えない。

この傾向を慧苑前後の書と並べて表示すると次の如くなる。

韻目書名				廣韻
微	之	脂	支	廣韻
獨用	通用			
(獨用)	(通用)	(獨用)		應音
微	之	支		韻詮
(通用)		(獨用)		苑音
(通用)				琳音
獨用	通用			集韻

故有坂秀世博士が「止攝諸韻の中では、北方では支脂まづ相合し、その後之韻これに合流し、その後微韻も亦前三韻と同音になったものと見える」(國語音韻史の研究、二九二頁)と、(支・脂韻が第一番に合流したと解されたのは、玄應・慧苑の書の示す特徴と合わない。秦音系では(支)韻は最も遅くまで獨立していたことは注目し値しよう。顏氏家訓音辭篇に「北人……以紫爲姉」、切韻序に「支脂魚虞共爲一韻」とあるのは、秦音系を指さないこと明らかである(因に、秦音系では(魚・虞)兩韻も混じない)。

また、これより見ると、長安に都をした唐代に於ても、長安音は許敬宗の作詩軌範から無視されていることもわかり、いろいろな面に面白い暗示を與えるものと言えよう。

二・三・六 蟹 攝

去聲開口二等(怪)・(夬)二韻通用の例がある。

邁(廣韻…莫話切・明夬開二)〔莫介反(明怪開二)〕

轄(廣韻…加喝切・見夬開二)〔加邁反(見怪開二)〕

合口韻に於る在り方の例を見ないが、恐らく、同様であつたろう。

(卦)韻は獨用して混淆しない。

許敬宗の示す通用軌範では(封)・(怪)・(夬)三韻通用し、玄應音義では(怪)・(夬)二韻の開口字は通用せず、合口字は通用している。韻註に於ては蟹攝の去聲韻目は傳わらないため、在り方はわからない。慧琳音義及び集韻では許敬宗の示す如く三韻通用している。

二・三・七 遇 流 攝

(模)・(尤)・(侯)三韻の唇音字に通用する例が見える。

剖(廣韻…普后切・滂厚開一)〔潘補反(滂姥合一)〕

矛(廣韻…莫浮切・明尤開三、但集韻作「迷浮切」、改入侯部)〔莫侯反(明侯開一、慧琳作「莫胡反」、明模合一)〕

この三韻に於る唇音の混淆は慧琳及び唐末五代の西北方言のみならず、日本漢字音にも現れるものであり、慧苑に於る様相はその先流と解すべきであろう（周法高「玄應反切考」三六九頁参照）。

二・四 唇音の開合

切韻及びそれ以後の唇音字の開合については問題が多く、種々の試論が行われているが、これ等の文字が慧苑に於て如何に取扱われているかを見てみよう。

慧苑に於る重唇音合口字の反切は次の如くである（輕唇音に於ては、輕唇化を起す原因の一つに合口性があると言われているのであるから、慧苑に於ても勿論合口的であり、いまは除外する）。

坏（廣韻…偏杯切・滂灰合一）〔普該反（滂哈開一）〕

集韻…鋪來切・滂哈開一

唐末五代（羅常培「唐五代西北方音」による。以下同じ。）には、杯 *pa i*（千字文）。

但し、唇音字以外は皆—w—。

匡（廣韻…普火切・滂果合一）〔普我反（滂哥開一）〕

頗（廣韻…普火切・滂禾・滂果才合一）〔普我普俄二反（滂歌開一）〕

頗（廣韻…同前）〔普歌反（滂歌開一）〕

唐末五代には、頗 *p'a*（千字文）、破 *pa*（大衆中宗見解）、頗 *pha*（*Text in Brahmi Script* ZDMG., 1936, 2718。以下同。）但し、唇音字以外は皆—w—。

癡(廣韻…薄官切・並桓合一)〔蒲寒反(並寒開一)〕

唐末五代には、磻 *ban* (千字文)^{宗見解}、盤 *p'an* (大乗中文字金剛經)^{宗見解}、槃 *phanhi* (大乗中文字金剛經)。

但し、唇音字以外は皆—W—。

捫(廣韻…莫奔切・明魂合一)〔莫痕反(明痕開一)〕

唐末五代には、本 *pon* 門 *bun* (千字文)^{宗見解}、本 *bun* 門 *mon* (大乗中文字金剛經)^{宗見解}、本 *pinni* (大乗中文字金剛經)。

但し、唇音字と他の字との區別は不明瞭である。

なお、集韻には(魂)その他八韻に開合兩呼の韻部が設けてあるが、廣韻には合口呼の韻部があるのみである。

以上、慧苑音義に見えるもののうち、廣韻に於て介母音に合口性をもつものの全部を挙げたのであるが、これらは皆、上記の如く開口性をもつ反切下字を與えているのである。

主母音が合口性をもつ場合は、

導(廣韻…滂古切・滂姥合一)〔潘補反(滂姥合一)〕

唐末五代には、補 *p'u* (阿彌陀經)。

但し、唇音以外のものも—u—。

また、(侯・模)兩韻通用により、

剖(廣韻…普后切・滂厚開一)〔潘補反(滂姥合一)〕

以上主母音が合口性をもつ場合は、慧苑に於ても合口性を維持している。

この様相は、從來、慧琳および唐末に見るものと考えられていたものであるが、早くも慧苑に見えていることより

考えれば、長安音に於て古い歴史をもつ變化であることが知られ、また殆んど規則的に變様していることは、唇音に於る開合は無對立であり「辨別的」なものではないとの説に、いま一應反省する資料を呈供するものであると言えよう。

なお、唇音ではないが、

絢（廣韻：許縣切・曉霰合四）〔呼遍反（曉霰開四）〕

の例もある。

二・五 聲 調

慧苑音義には廣韻で理解の出来ない聲調の混淆も見えている。

全濁上聲が去聲に轉じたものとして、

憤（廣韻：房吻切・奉吻合三）〔夫問反（奉問合三）〕

また、字義同じきため聲調を一つにしたものとして、

瞻（廣韻：時豔切・禪豔開三）〔市焰反1（禪豔開三）・時燄反2（禪琰開三）〕

廣韻に於ては焰は去、燄は上と區別するが、集韻には去聲五十五豔のみに兩字通用として同屬させている。慧苑に於ても兩字共に去聲であるらしいことは次の例から考えられる。

厭（廣韻：於豔切・影豔開四）〔於燄反〕

塹（廣韻：七豔切・清豔開四）〔七燄反〕

また、全濁去聲が上聲に轉じているものとして、次の例がある。

稚（廣韻：直利切・澄至開三）〔直履反1（澄旨開三）〕

また、全濁音以外においても、

玷（廣韻：多忝切・端忝開四）〔丁念反 2（端忝開四）〕

玷は廣韻では（忝）一韻にのみ見えるが宋跋本王韻、集韻には（忝）・（忝）兩韻に見える。

漁〔御居疑據二反 1・語居語據二反 1〕

漁は廣韻では（魚）韻にのみ見えるが、集韻には（魚）・（御）兩韻に見える。

このような聲調轉移の例は數も少なく、變化の條件はつかみにくい。然し、この流は慧琳にも續くようであり、後にさらに考えたい。

二・六　む　す　び

以上は聲韻分類の際に見た反切の特異なものを列挙したまでであり、このほか、清濁等なお多くの問題があるが、いまは省略する。表を詳細に見ていただけるならば、これらの様相は明瞭であろうと思つたからである。

以上は、一九五七年一〇月の東京大學に於る、倉石博士還曆記念の中國語學會の席上發表したメモを整理したものである。

三　音譯漢字篇

三・一　反切をもつ梵語音表記漢字

三・一・一　梵語字母

慧苑音義の對象とした唐・實叉難陀譯八十卷華嚴經の第七十六卷入法界品第十七には所謂「四十二字母」があげられている。慧苑はこれに對しても若干の注音をしている。いま、この兩者を對照表示すると圖の如くなる。

譯者名 梵語	實叉難陀	慧苑	譯者名 梵語	實叉難陀	慧苑
a	阿		dha	拖	
ra	多		śa	奢 尸苛反	奢 尸何反, 借音也
pa	波		kha	佉	
ca	者		kṣa	叉	叉 楚我反
na	那		sta	娑 ^{蘇紇} _反 多 ^{上聲呼}	娑哆 娑, 桑紇反 哆, 當我反
la	邏		ña	孃	
da	拖	拖 駄之輕聲	rtha	曷擢多	
ba	婆 蒲我反	婆 婆之上聲	bha	婆 蒲餓反	婆 婆之上聲
ḍa	茶 徒解反	茶 茶之上聲	cha	車 上聲呼	車 昌野反
ṣa	沙 史我反	沙 史我反	sma	娑 ^{蘇紇} _反 麼	娑麼 娑, 桑我反
va	縛 房可反	縛 房我反	hva	訶 ^{二字皆上聲呼} 婆	訶婆 並上聲呼
ta	哆 都我反	哆 哆之上聲	tṣa	縑 七可反	縑 倉我反
ya	也 以可反	也 夷我反	gha	伽 上聲呼	伽 伽之上聲
ṣṭa	瑟吒		ṭha	吒	吒 陟加反
ka	迦		ṇa	拏 孃可反	拏 擲可反
sa	娑 蘇我反	娑 娑之上聲	pha	娑 ^{蘇紇} _反 頗	娑頗 娑, 桑紇反
ma	麼	麼 莫我反	ska	娑 ^{同前音} 迦	娑迦 ^(註1) 並上聲呼
ga	伽 上聲輕呼	伽 伽之上聲輕呼	ysa	也 ^{夷柯} _反 娑 ^{蘇柯} _反	也娑 也, 夷我反 娑字上聲呼之
tha	他 他可反	他 他之上聲	śca	室者	
ja	社		ṭa	佉 恥加反	佉 恥加反
sva	鎖		ḍha	陀	

(註 1) 磧本·麗本·宋元本無「迦」字, 琳音作「伽」, 今據明本。

			軟口蓋音	硬口蓋音	ソリ舌音	齒音	唇音
破裂音	無聲	無氣	ka〔迦〕	ca〔者〕	ṭa 佗 恥加反	ta 哆 哆之上聲	pa〔波〕
		有氣	kha〔佉〕	cha 車 昌野反	ṭha 吒 陟加反	tha 他 他之上聲	pha〔頗〕
	有聲	無氣	ga 伽 伽之上聲輕呼	ja〔社〕	ḍa 茶 茶之上聲	ḍa 拖 駄之輕聲	ba 婆 婆之上聲
		有氣	gha 伽 伽之上聲	(jha)	ḍha〔陀〕	dha〔拖〕	bha 婆 婆之上聲
鼻音			(ṇa)	ṇa〔壤〕	ṇa 拏 擲可反	na〔那〕	ma 麼 莫我反
半母音				ya 也 夷我反	ra〔多〕	la〔邏〕	va 縛 房我反
摩擦音				śa 奢 尸何反, 借音也	ṣa 沙 史我反	sa 娑 娑之上聲	

註

- (1) 〔 〕は實叉難陀の用字であることを示す。
 (2) ()は「四十二字母」に見えない梵語音。
 (3) ソリ舌音の ṭa 佗・ṭha 吒は反切より見れば反對になつて、ṭa 吒
 陟加反・ṭha 佗^{恥加反}とあるべきであるが、慧苑の示すがままにして訂
 正しなかつた。

上の「四十二字母」に於て、慧苑が音註を與えているものは、實叉難陀との見解の差を表わしているのであることは確かである。音註を與えていないものは、慧苑も亦同意見であつたからであらうと見て、これをそのまま慧苑の音

でもあると假定し、この字母を調音方法・部位に従つて分類圖示すれば前頁の如くなる。

字母に於て梵漢の間に見得る特徴は、

1、梵語字母の調音法は漢字の上聲に對應するものが多い。

寡聞にして梵語字母調音の際に採られる聲調についての記事を知らないが、現代インド人の調音法は尻下りに發音するのを聞いた経験がある。思うに、子音字母を發音する際、便宜上母音 a を連接してなされるのであるが、注意力はあくまで初頭の子音にあり、自然、尻下りの調音をとるのであらうかと考える。しかし、*ṭa*・*ṭha*・*śa* が平聲の、*da* が去聲の注音をされている例外もあり、明確な状況を詳知出来ない。後の機會になおよく考えたいが、梵語字母に漢字上聲の對應するものが多いということは、聲調の値を考へる上に充分注目すべきことと思う。

2、漢字の濁聲母は梵語の有聲有氣音に對應する。

軟口蓋音と齒音の有聲音に次の如き對立表記が見える。

ga	伽	伽之上聲輕呼
gha	伽	伽之上聲輕呼
da	拖	拖之輕呼
dha	拖	拖之上聲輕呼

すなわち、梵字母の氣音の有無は、漢字の「輕呼」の注記の有無に對應している。このことは、「漢字の濁音は梵語音の有聲有氣音に對應する」ことを意味するものと解せられよう。

その他の濁音については明瞭な記事はないが、この二例と同様であると推測することも難くないであらう。

三・一・一一 實叉難陀の音譯漢字に對する慧苑の音註

ここには實叉難陀譯八十卷華嚴經中の音譯語彙及び慧苑の正梵音表記に使用されている漢字に對して慧苑が施した音註を梵漢兩面を對照して特徴を見てみたいと思う。

まず全語彙を挙げる。(縮語の頁
数を示す)

1 阿蘭若法 若・然也反(日馬開三)、阿蘭若者、或曰阿蘭那、正云阿蘭撰云*(一〇九ウ)

Skt. arāṇya: Chin. *hā

〔拙稿「非鼻音化」東洋學報第三十九卷、第四號、二九頁以下參照〕

2 毗盧遮那 按梵本毗字應音云無廢反(合三)云*(一〇三行)

Skt. vairocana: Chin. ṃiwei > *viwei

3 羅喉 喉・胡構反(匣候開一)云*(一〇八行)

Skt. rāhu: Chin. rau

〔拙稿「曉・匣兩聲母の對音」東洋學報第四十卷第四號參照〕

4 紇差怛羅 差・初界反(穿倚開二)云*(一〇二行)

Skt. kṣātra (kṣetra): Chin. tš'au

[Edgerton, BHS, 198 b]

5 阿彌多羅三藐三菩提 彌・奴沃反(泥沃合二)藐字按梵本應音云彌略反(明藥開四)云*(一〇三行)

Skt. amūta-saṃyak-saṃbodhi: Chin. -muok-miak

6 瞿提 瞿・初見反(穿開二)云*(一〇四行)

Skt. kṣānti: Chin. tš'an

7 迦羅 迦音置駄反(見簡開一)云*(一〇五行)

慈苑音義音韻攷

Skt. kāla: Chin. *kā*^o

8 阿溼𦵏音苻何反（蘇麗琳三本奉敬開一）、無何反（宋元明三本明敬開一）云々（一一四ウ一〇行）

Skt. *śva*: Chin. *bā* > *vā* (煩), *mā* > *mā* (麻)

9 蒹忙 蒹・奴感反（破本「奴感反」、泥談開一。麗慈、琳音並無反切）（一二〇行）

Skt. *nāma*: Chin. *nām* (葭木), *nām* (案元)

10 矜羯〔羅〕 矜・居凌反〔見蒸開三〕 〔一三行〕

Skt. kin̄kara: Chin. *kiāng*

11 摩婆〔羅〕 婆之上聲（並果合一） 並（並合開一） 云々（一二一才三行）

Skt. *mavara*: Chin. ${}^{\circ}b'u\hat{a} > {}^{\circ}b'\hat{a}$

12 彌伽婆伽之上聲 (開三) (才一三行)

Skt. *māgava*: Chin. *giā*

13
〔毘〕〔攞〕〔伽〕
郎我反
（開一）（來聲）
（才一）（二一）
（四行）

Skt. *virāga*: Chin. *lâ*

毘伽擔 擔・多甘反 (端談一) (才四行)

Skt. *vikhyātam*: Chin. *tām*

15 璧攞陀 璧玉・於奚反 (影齊開四) (才一四行)

Skt. *elada*; Chin. °iei

- 16 阿麼〔恒羅〕 麼・莫我反(明一) (一四行)
 Skt. amātra: Chin. ma
- 17 勃〔摩恒羅〕 蒲沒反(並沒合一) (一二行)
 Skt. bhramātra: Chin. b'uet > b'ei
- 18 翳〔羅〕 煙計反(影霧開四) (一四行)
 Skt. ēla: Chin. iei
- 19 薺〔羅〕 蒲計反(並霧開四) (一四行)
 Skt. zēla: Chin. b'iei
- 20 宰〔步羅〕 蘇沒反(心沒合一) (一二行)
 Skt. svēla, svūla: Chin. suot
- 21 脾〔羅〕 普計反(滂霧開四) (一二行)
 Skt. phēla: Chin. p'iei
- 22 謎〔羅〕 莫計反(明霧開四) (一二行)
 Skt. mēla: Chin. miei
- 23 〔娑攏〕茶 宅加反(澄麻開三) (一二行)
 Skt. sarāṭa: Chin. ḍā
- 24 古婆羅窟 古・式占反(審鹽開三) (一二行)

- Skt. campaka (?) : Chin. ś'ian (對應關係不明)
- 25 大目軋連 軋・渠焉反 (羣仙 云々 (一二四行)
Skt. maṅḍalyāyana : Chin. g'ian
- 26 國名達利鼻奈 荼・除加反 (澄廉 云々 (一二四ウ)
Skt. dr̥vīḍa : Chin. d'a
- 27 俱拘羅鳥 枳・經以反 (明止 云々 (二〇行オ)
Skt. koka : Chin. ki
- 28 阿庾多 庾・逾主反 (喻盛 云々 (一二五オ)
Skt. ayuta : Chin. 'iu
- 29 輸羅 輸音宜 (諸本並作宜 琳音作器) 借上聲呼 (審廢) (一二六行)
Skt. śura : Chin. ś'iu
- 30 嵐毗尼 嵐・盧含反 (明來 云々 (一二七ウ)
Skt. lumbini : Chin. lan
- 31 安縹那藥 縹・時戰反 (明線 云々 (一二九ウ)
Skt. añjana : Chin. z'ian

慧苑が音註を施した漢字の音節位置と聲調を梵語のそれと對照して見てみよう。

a 梵語長母音は漢字去聲に對應する。

2	Skt. <i>vai</i> :	Chin. <i>ŋiəw</i> > <i>ʷiəi</i>
4	≡	<i>tʃai</i>
6	≡	<i>kʃān</i> : <i>tʃan</i>
7	≡	<i>kā</i> : <i>kā</i>
18	≡	<i>e</i> : <i>iei</i>
19	≡	<i>ve</i> : <i>biei</i>
21	≡	<i>the</i> : <i>pʰiei</i>
22	≡	<i>me</i> : <i>miei</i>

その他の表記を與えられた梵語長母音、例えば [14. Skt. *amitra* : Chin. *°mā*] 等は果して梵語の發音自體に於て長母音の機能を行つたかどうかを吟味せねばなるまい。

b 梵語の終りより二番目の音節は漢字上聲に對應する。

11	Skt. <i>ma^uara</i> :	Chin. <i>°bua</i> > <i>°bā</i>
12	≡	<i>mā^ura</i> : <i>°gā</i>
16	≡	<i>amitra</i> : <i>°mā</i>
27	≡	<i>ko^ula</i> : <i>°ki</i>
28	≡	<i>ayūta</i> : <i>°iū</i>
29	≡	<i>śūra</i> : <i>°śū</i>

以上は慧苑の音註のあるもののみを見たのであるが、實叉難陀の用字について見てもほぼこの傾向は認められるし、廣く唐代の他の書籍に於る梵漢の對應關係にも、多くの例外がありながらも、なお、この漢字の上聲と去聲の對應特徴は承認出来るようである。

この特徴は唐代の漢字音調値を考える上に重要な事柄だけに、いまは慎重を期して、ただこの對應傾向を指摘するにとどめ、詳細は後日さらによく調査したい。

三・二 正梵音を表わす漢字

實叉難陀の使用した音譯語表記法を何らかの意味で承認せずに、これに對して慧苑自らが考出した梵語音を表記する漢字を示す方法に三通りの標出法がある。

a 具 云……

b 正 云……

c 具正 云……

この三様の標出法の差別について慧苑は何ら記すところはない。恐らく、それ程嚴密な區別意識があつてのこととも考えられず、その間に本質的な差異があるとも見えないのであるが、「具」という語の概念が「完全なる語形」すなわち *transliteration* を意味するかとの危惧もあり、いまは慎重を期し、假に、第二・第三の「正云、具正云」の標出法によるものに限り整理の對象とした。蓋し *transcription* と *transliteration* とを區別したい意圖によるに他ならない。

1 阿蘭攬 (一〇九_行) Skt. *aranya*

「阿蘭若法」若・然也反、阿蘭若者、或曰阿蘭那、正云——、此翻爲無諍聲_{云*}
〔蘭、琳音作爛。攬、麗本作攬。拙稿「非鼻音化」附表參照〕

2 末尼 (一〇九_ウ) Skt. *mani*

「摩尼」正云——、末謂末羅、此云垢也、尼云離也_{云*}

3 韓室羅憐囊 (一一〇_キ) Skt. *vaśīraṇṇa*

「昆沙門」具正云——、此云多聞_{云*}

4 鑠羯囉 (一一〇_オ) Skt. *śakra*

「釋迦因陀羅」釋迦能、正云——、此云帝也。

5 末梨 (一一〇_ニ) Skt. *bali(ka)*
〔此の語、麗本及び琳音のみに見え、碩宋元明本共に無し〕

「婆稚」正云——、此云有力。

[Edgerton, *BHSD*, 398b; Soothill, *Dict. of chin. Bud. Terms*, 346b.]

6 紇差怛羅 (一一_キ) Skt. *kṣātra (kṣetra)*

「佛刹」刹、具正云——、此云土田也、差・初界反。

[Edgerton, *BHSD*, 198b]

7 三摩地 (一一_キ) Skt. *samādhi*

慧苑音義音韻攷

「三昧」具正云——、此云等持云*

〔具正、磧本作具、琳音作具足正、今據麗本〕

8 染部捺陀 (一一^ウ_三) Skt. jambu-nada

「閼浮檀金」具正云——、此是西域河名云*

9 尼羅烏鉢羅 (一一^ウ_三) Skt. nila-utpala

「優鉢羅華」具正云——、尼羅者此云青、烏鉢羅者花號也云*

10 鞞坡致迦 (一一^ウ_三) Skt. sphatika

「頗梨色」正云——云*

〔坡、磧麗宋元明並作堵、今據琳音〕

11 琰摩邏闍 (一一^ウ_三) Skt. yama-rāja

「閼羅界」閼羅、具正云——、此云遮止云*

〔邏闍、磧宋元明並作閼邏、麗本作閼羅、但十三行作邏闍、琳音作邏闍〕

12 鉢特忙 (九^ウ_二) Skt. padma

「波頭摩花」正云——、此曰赤蓮也云*

13 瞻部提 (一一^ウ_三) Skt. jambu-dvīpa

「閼浮提」正云——、瞻部・樹名也、提・此云洲也云*

14 布嚕婆毗提訶 (一一^ウ_三) Skt. purva-videha

15 「弗婆提」具正云——、言布嚧婆者此云初、謂日初出處、此翻爲東也、毘・勝也、提訶・身也。
 毘怛羅句嚧(一三〇行) Skt. *utara-kuru*

16 「鬱單越」具正云——、言毘怛羅者此云上也、勝也、句嚧・所作也云々
 曼殊室利(一三〇行) Skt. *mañj-srī*

「文殊師利」正云——、言曼殊者此云妙也、室利・德也。

17 吠濫婆(一三〇行) Skt. *vairambha*

「毘藍風」正云——、言吠者散也、濫婆者所至也云々

18 迦邏沙曳(一三四〇行) Skt. *kaśya, kaśya*

「袈裟」具正云——、此云染色衣也云々

〔音譯漢字より還元すれば **kaśaśaye* となる。邏は或は長母音に對應するかとも思うが、いまは疑を残す。對音表には採入しない〕

19 僧揭𧄢(一三四〇行) Skt. *sanghātī*

「僧伽梨」正云——、此曰和合衣云々

20 杜多(一三四〇行) Skt. *dhuta*

「頭陀」正云——、此云抖擻云々

21 沙迦憐囊(一三四〇行) Skt. *śramaṇa*

「沙門」正云——、此云止息云々

慧苑音義音韻攷

- 〔諸本並作迦、但奈良朝寫「華嚴經音義私記」作羅、恐羅之誤歟〕
 22 恒唎耶恒唎奢 (一四[△]行) Skt. *trayastriṅśa*

- 〔忉利天〕忉利・梵言正云——言恒唎耶者此云三也、恒唎奢者十三也 云[△]
 23 摩醯溼伐羅 (一四[△]行) Skt. *mahesvara*

- 〔摩醯首羅〕正云——言摩醯者此云大也、溼伐羅者自任也 云[△]
 24 迦那牟尼 (一五[△]行) Skt. *kanakamuni*

〔拘那牟尼〕正云——言拘那者此云金也、牟尼・色也、仙也 云[△]
 〔琳音作迦那迦牟尼〕

- 25 毘溼婆部 (一五[△]行) Skt. *viśvabhū*

- 〔毘舍浮〕正云——言毘溼婆者此云遍一切也、部・自在也 云[△]
 26 式葉那 (一五[△]行) Skt. *śikhin*

〔尸棄〕正云——此云持髻、或曰有髻也。

- 27 勃沙 (一五[△]行) Skt. *puṣya*

〔弗沙〕正云——此云增威。

- 28 底舍 (一五[△]行) Skt. *dēśa*

〔提舍〕正云——依西域訓字云、底謂底邏那、此云度也、沙謂睹沙、此云說也、言說法度人。

- 29 捺羅陀羅 (一五[△]行) Skt. *naradhara*

30 迦羅(一五オ) Skt. *kala*
「那羅陀華」那羅、正曰捺羅、此云人、陀謂陀羅、此云持也云々

「哥羅分」正云——、(中略)、迦音臺駄反。

31 鳩波尼殺曇(一五オ) Skt. *upaniśadant*

「優波尼沙陀分」正云、言鳩波者近也、尼殺曇者少也云々

32 窣路陀阿鉢囊(一五オ) Skt. *śrota-dhama*

「須陀洹」正云——、言窣路陀者此云入也、阿鉢囊者此云流也云々

33 補特伽羅(一六オ) Skt. *pudgala*

「補伽羅」正云——云々

34 毗奈耶(一六オ) Skt. *vinaya*

「毘尼」正云——、此曰調伏云々

35 牟娑羅揭婆(一七オ) Skt. *muśtragatva*

「車渠」梵音正云——、言牟娑羅者此云勝也、揭婆・藏也云々

36 鉢羅摩禍羅(一七オ) Skt. *pravāda*?

「珊瑚」梵本正云——、謂寶樹之名云々

〔對音不明、今不採〕

37 阿制多(一七オ) Skt. *ajita*

慧苑音義音韻攷

「阿逸多」正云——、此曰無能勝也。

〔制廣韻、征例切、應音作氏廣韻、承紙切、禪經開三、清濁の差あり〕

38 南 忙 (一二〇*) Skt. *namā*

〔南無〕正云——、此曰敬禮、南・奴感反。

〔破本作奴感反、宋元明三本作奴慙反、麗本琳音並無反切〕

39 設 施 (一二〇*) Skt. *śāśi*

〔舍支〕正云——、謂月之別名云*

40 阿彌陀婆耶 (一二一*) Skt. *amitābhaya*

〔阿彌陀佛〕正云——、此云無量壽。

41 設利羅 (一二二*) Skt. *śārīra*

〔舍利〕正云——、或云實利、此翻爲身也。

42 阿泥嚧多 (一二四*) Skt. *aniruddha*

〔阿菟樓駄〕正云——、此云無減。

三・二・一 對 音 表

上節に舉げた慧苑の云う正梵音とその音譯漢字とを、各對應する音節毎に分類して次に表示する。これも嚴密には梵語の語頭・語中・語末の區別をしてなすべきものであるが、甚だしく複雑なものとなるため、不満足ながら、いまは語に於る位置を無視して分類を進める。尙、この表には、参照の便宜上、先の字母表に見えるものも並收した。

端			微	明		奉	並				滂	幫	聲母
dh	d	t	m	b	m	v	v	p	bh	b	ph	p	梵文
多		多 哆 反當我		摩 忙	麼 反莫我	縛 反房我	婆		婆 聲上	婆 聲上	頗 坡	波	a
			弭			毘							i
				牟						部		補	u
				摩									ā
													ī
									部			布	ū
	de 底					vai 吠	vai 韓						ai (e)
													au (o)
		ta(r) 怛		ba(l) 末	ma(ni) 末 mañ(j) 曼 ma(n) 懣	va(r) 伐		pu(s) 勃				pa(r) 鉢 pan(n) 鉢 pūr 本	そ の 他

來	娘 _三	娘 _二	澄	徹	知	泥		定				透
r	n	ṇ	ḍ	ṭh	ṭ	ṇ	n	t	ḍh	dh	d	th
羅 囉		拏 反溺 司	茶 聲上	佗 反恥 加	吒 反陟 加	囊	囊 那 奈	陀	陀	拖 陀	陀 拖 韓默 聲之	他 聲上
	尼			致		泥			地 呼平 聲			
噓 嚕												
利	尼			抵								
										杜		
											提 de	
路 ro												
r 噓 ra(ṇ) 蘭 ra(?) 喇 ram 嚕 ra(?) 喇 rip(?) 喇						na(d) 捺 na(m) 蘭 na(r) 捺				dam 曇 d 特		

	心	穿 _二	審 _二	照 _三	穿 _三	審 _三	禪	日	見	溪
l	s	kɕ	ʃ	j c	ch	ś	j	j	n̩ k	kh
羅	娑 <small>聲上</small>	差	沙 <small>反史我</small>	者	車 <small>反昌野</small>	奢 <small>反尸何</small>	社 闍		迦	佉
梨				制						棄
							殊		句	
	娑								迦	
s(p) 寧' s(r) 寧' sa(m) 三 sam(g) 僧		s 數、 sa(d) 煞 šya 沙	s 沙、 šya 沙			ś(r) 室 ś(v) 溼 ša(s) 設 ša(t) 設 śa(k) 鑠 ś(i)(k) 式	jam 瞻	jam 染	nya 攬	k(ɾ) 羯

		pa(ŋ) 鉢 • pan(d) 般 • pañ(c) 般 pan 半 • pā 波 • pā 播 • pu 補 pū 布	pu(r) 本	puŋ(d) 奔 • pū 補 • pū 布 • pū 俾 p(re)c 畢
	v	vā 波		
非	p	p(re) 閉 • p(rth) 必 • piŋ(d) 賓 piŋ(d) 擯 • pī 卑 pu 富 • pu(t) 弗 • pū 富		
滂	ph	pha 頗	pha 坡	pha 破
並	b	b(rā) 婆 • ba 婆 • bā 婆 • bu 部	bu 部	ba(r) 跋
	bh	bha 婆 • bha(s) 薄	bha 婆 • bhū 部	bhā 婆 去聲
	p		pu(s) 勃	pī 毘
	v	va 婆 • va(t) 跋 • va(r) 跋 van 槃 • vā 婆 • vāt 跋 • vī 鞞 vai 鞞 • vyān(j) 颯		
奉	b	bim(b) 頻 • bo(d) 佛		
	bh	bhi 毗 • bhū 浮		
	v	va 縛 • va 伐 • va(t) 伐 • va(r) 伐 van 煩 • vā 縛 • vān 梵 vi 毗 • vi 鼻 • vī 鼻 • vai 吠	va(r) 伐 • vai 吠	va(st) 伐 • va(st) 筏

この表に見るように、玄應においては唇音漢字の輕重を無差別に唇音梵文に對應させているが、慧苑・慧琳の兩者においては、已に、〈非母は梵文 p に對應せず、奉母は梵文 b・bh に對應させていない。少數の上例のみから何らかの結論を引き出すことは危険の如くであるが、上に見た反切に於る輕重分離の様相と考え合わせるならば、なお、「輕唇音化」は慧苑の時代すでに開始していたと推定しても大きな過誤を犯すこととはならないものと信ずる。

ただし、この從來重唇音であつた文字の一部分がある條件の下にある時には「輕唇化」という現象は、變化の最初から唇齒音の調音をしたものか、或は「重唇破裂→重唇摩擦→唇齒摩擦」の段階を経たものかは、なお明瞭ではない。この二つの経緯の何れも理論的に考え得られるものであろう（手近かには有坂秀世「音韻論」六六頁に諸種の例が彙集してある）から、中國語に於て變化の最初から唇齒調音をし今日に及んだ、と考えても何の差支えもないようである。

然し、ここに、このように安易に斷定するには躊躇を覚える事實がある。それは、音義の對象八十卷華嚴經の原本は于闐將來のものであり、その譯者實叉難陀も亦于闐より來た人であるばかりでなく、慧苑およびその師の法藏とも同時代であるため、當然華嚴經を繞つてのその間の交渉も考えられるのであるが、その于闐における言語においては、兩唇破裂音 b は語頭では兩唇摩擦 [β] に調音され、また半母音 v も兩唇性 [W] をもつていたと言われている [S. Konow, *Primer of Saka Khotanese*, p. 15-19]。

このような對應言語の様相は、直ちに輕唇化即ち唇齒音化とすることに躊躇する原因ともなるが、さりとて、輕唇化の進行過程に兩唇摩擦の中間段階があつたという明瞭な事實を見出し得ない。

輕唇音が唇齒調音であることを指摘した記事は慈覺大師圓仁の在唐記に

v 以本鄉婆字音呼之。尙前婆字(b)是重。今此婆字是輕。有人以唐國嘽音呼之。甚錯。と述べているのを初見とする。

梵文vの印度および西域における音價の變遷は、拙稿「瑠璃音聲考、——梵漢對音方法論の再檢討——」(昭和二年一月〇月油印)に詳論した。以上、「輕脣化」についての從來の解釋に疑問を述べたまでで、解答は尙今後の調査に俟たねばならないものであることを強調したい。

舌音に於ての注目すべきことは、舌頭音(端・透・定・泥)は梵文の單純舌音に對し、舌上音(知・徹・澄・娘)は梵文の反轉音に對應する大勢は明瞭に見取れる状況にあることである。

なお、ba(ㄅ)：末、jam：染の對應に見るように、語頭に鼻音を持つ漢字が、その鼻音要素を弱化して單純子音の如くなつて來る傾向即ち Denasalization が見える。この現象は音韻の機能として變化なきため、反切上字に變りはないが、慧苑が長安人として最初にこの傾向を見せ、而も日(母陽聲にまで及ぼしていることは注目に値することである)。

この詳細は前記拙稿「非鼻音化」に述べた。

三・一・三・一 主 母 音

梵文a(ㄚ)には(歌・麻)韻系の漢字が壓倒的に多く對應していることが目立つ。

梵文i(ㄣ)には(脂・之)韻系の漢字が多く對應している。反切では(脂・之)兩韻系と混同しない(支)韻の上聲(紙)韻の「弭」がmiに對應している(語彙四十一)のが目立つが、梵漢對音ではこの混淆は玄奘より見えていて、主母音に差のないことを想像させる(有教博士「上代音韻考」三六〇頁)が、(微)韻のiに對應しているものは見ない。(齊)韻の「泥」：niの對應は止攝にni音

のなきためかも知れないが、清音の「制」(祭韻の字)が*ji*に對應しているのは解せない。或は原音が既に清音化していたものかとも考えるが、于闐語資料の面にもこれを跡づけるようなものは見出せなかつた。後にさらに考えたい。

梵文 *u* (*ā*) には(虞・模)・(尤・侯)韻系の漢字が共に對應しているが、これは反切を吟味した際に見た傾向と略々一致しているものと言えよう(反切では(虞)韻系の字は他とは混じらないようであるが、慧苑の前後の時代の在り方を考え合わせるならば、概略この傾向を認めて差支えなからう)。

梵文 *ai* (*e*) には(齊)韻系の漢字が對應しているようである。

梵文 *au* (*o*) に對應するものは「路」(來暮合一)一例より見えず、梵漢對音の面からは梵文 *ā* との間の差異は明瞭ではない。

三・一・三・三 尾 音

尾音に關して梵漢對音の面より知り得べき最も注意すべきことは、軟口蓋鼻音の語尾をもつ(陽・唐)韻系の字が語頭鼻音をもつ場合、梵語の單純開母音に當てられていることである(語彙 No. 3, 12, 21, 32, 38)。

この類の最も早いものの一つは、玄奘の大唐西域記(京大本一)に於ける

奔讓舍羅 *N.-W. Pkt. pu(i)kaśāla < Skt. puṇḍśāla*

があるが、印度西北方音に對應するものであり、なお、原音に吟味すべき點があつて同類の例と直ちにはなし難い(前記拙稿「非鼻音」(化二三頁参照))。

従來、一般にこの現象は唐末五代に見える特色の如く考えられていたのであるが、語頭鼻音の *Danasalization* 發生に關連並行して現れて來ることは注目すべきことであらう。但し、この音價については、慧苑音義に見ゆる資料のみからは決定的な鍵もないのであるが、到底 *-ang > -a* と全く鼻音をなくしたものとを考えられず、恐らく *-ā* と鼻母音の姿をとつたであらうと想像するのであるが、これについては、他の資料と關聯させて後日專論したく思っている。

四 おわりに

以上慧苑音義に見える特徴を、反切および音譯漢字の両面から視つたのであるが、何分、例證の少きものをさらに聲類・韻類に分つたものゆえ、殆んど各所に孤證の如きもの、或は全く例の見えない部門等があり、全體の體系を知るには甚だ不充分であつたことはまことに残念なことである。しかし、數少い例證も、もし慧苑の前後の書に見える特色と並べ、音韻史の流れの中に見るならば、なお、充分に合點のゆくものばかりであつた。

いまは、主として、當面の資料を分析した素材を呈供するに止まり、總合的な解釋にまで進み得なかつたのであつたが、これについては他日別稿を準備したく思つてゐる。(一九五八・九・一〇)

(本稿の後半は昭和三十三年度科學研究費各個研究助成金による研究の一部である。)